黒川沿いの草木

2024.7.7　大島

・ニセアカシア（ハリエンジュ）

きれいな花が咲き、観賞用として価値が高いことからもともとは街路樹や公園用として植栽された[16]。土質を選ばず生育でき[5]、繁殖力が強く、根から根萌芽が多数出ることや、切り株からの萌芽力が極めて高いことなどで難駆除雑木、侵略的外来種として嫌われる。さらに、風で倒れやすいことなどの課題もある。棘が発達するため扱いづらい点も挙げられる。つぼみや花、若芽は食用になる。花から上質な蜂蜜が採れ、有用な蜜源植物である

・センダン

果実はしもやけ、樹皮は虫下し、葉は虫除けにするなど、薬用に重宝された。夏の日の午後は梢にクマゼミが多数止まり、樹液を吸う様子が見られる。果実はヒヨドリやカラスなどの鳥が食べに訪れ、種が運ばれて空き地や道端に野生化することもある。しかしサポニンを多く含むため、人や犬が食べると食中毒を起こし、摂取量が多いと死亡する。

・ニワウルシ

別名、**シンジュ**（神樹）。和名に「ウルシ」がついているが、ウルシ（ウルシ科）とは全くの別種。ウルシのようにかぶれる心配はない。花期は6月。雌雄異株で、夏に緑白色の小花を多数円錐状につける。果実は秋に褐色に熟し、披針形で中央に種子がある。枯れて白っぽくカサカサになった翼果が、冬でも枝によく残る。中国では根皮や樹皮を**樗白皮**（ちょはくひ）の名で解熱・止瀉・止血・駆虫などに用いる。

・アカメガシワ

春にでる若葉が紅色をして目立つのが名の由来。葉と種子は染料、樹皮は健胃の生薬になる。別名**ゴサイバ**（五菜葉）和名「アカメガシワ」の由来は、新芽が鮮紅色であること、そして葉がカシワのように大きくなることから命名されたといわれる。材は軟らかく、床柱・下駄・薪炭に用いる。種子と葉は染料になる

・クワ

クワの名の由来は、カイコの「食う葉」が縮まったとも、「蚕葉（こは）」の読みが転訛したともいわれている。葉縁にはあらい鋸歯がある。葉の形は変化が大きく、切れ込みのない葉や、切れ込みがあるもの葉などさまざまである。大きい木では葉の形はハート形に近い楕円形だが、若い木では葉に多くの切れ込みが入る場合が多い。実は赤い色が黒くなると食せるが、口がムラサキになるのでご注意を

・ナンキンハゼ

中国原産で、秋は美しく紅葉し、街路樹や公園樹に利用されている。別名、**トウハゼ**。種子からハゼノキ同様に蝋（ろう）や油がとれ、種子の油脂の烏臼油は、石鹸・蝋燭の原料や、薬用（腫物、皮膚病）とされる。
根皮、果実は乾燥して、利尿剤、瀉下剤にする。これを**烏臼**（うきゅう）という。

・クチナシ

アカネ科の多年生常緑樹で、白い花を咲かせた後に濃いオレンジ色の実をつけます。くちなしの果実は熟れても割れないのが特徴で、そのことから「口が開かない」という表現に転じ、くちなしと名付けられたといわれています。秋（10 - 11月）ごろに、赤黄色の果実をつける。サフランの色素の成分と同じ「クロシン」という黄色い色素が含まれているのが特徴です。水に溶ける色素のため、くちなしの実を割って煮出すことで煮汁が鮮やかな黄色に色付きます。昔から染料や料理の色付けに使われているだけでなく、漢方薬としても効能があるとされている果実です。漢方薬に使われる際は「サンシシ（山梔子）」と呼ばれています。

・アガパンサス

アガパンサスは「紫君子蘭（ムラサキクンシラン）」や「アフリカンリリー」とも呼ばれている多年草です。花弁が反り返っているのが特徴で、光沢のある葉から花茎をすっと伸ばした先に花を咲かせます。花言葉恋の訪れ、ラブレター、恋の季節

・エノキ

•縁起の良い木を意味する「嘉樹（ヨノキ）」が転じてエノキとなった。
•秋にできる朱色の実は野鳥などが好んで食べることから、「餌の木」からエノキとなった。・”よのきをうえよ”家康の一理塚。大きな緑陰を作るため、ケヤキやムクノキなどとともに各地の一里塚や神社仏閣に植栽された。葉は互生し、葉身は長さ4 10 (cm) の卵形または楕円形から長楕円形で、先は尾状にのびて左右非対称。葉の質は厚く、葉縁の上半分には鋸歯があり、下部は全縁である。先端まで葉脈が発達しておらず、丸みを帯びている。秋には黄葉し、虫食いや斑点があるものが多い国蝶の**オオムラサキの幼虫**が、この葉や実を好んで食べ、葉の裏で**サナギ**になることでも知られています。

・ランタナ

和名は**シチヘンゲ**（七変化）。鮮やかな色の花をつけ、その色が次第に変化することに由来する。（日本の）園芸上は単にランタナと言った場合、コバノランタナを除くランタナ属の園芸種全体を指すことが多い。世界の侵略的外来種ワースト１００に選定されている。

・クズ

日本では古くから食用や薬用に用いられ、天然繊維の材料としても用いられている。長くて大きな根からは、葛粉がとれる。あまり一般的ではないが、春から初夏にかけて出る、伸びはじめたつる先のやわらかい若芽（先端から5 - 7 cm）は、摘み取って食用にすることができ、茹でてから水にさらして、おひたし、和え物、煮物に、生のまま天ぷらなどにする。薬用に利用でき、日本や中国では薬物名として根を**葛根**（かっこん）、花が**葛花**（かっか）、葉は**葛葉**（かつよう）とよんで生薬にする。クズの繊維で編んだ布は新石器時代の遺跡からも出土している。茎（つる）の繊維は丈夫で、このつるを煮てから発酵させ、取りだした繊維で編んだ布は葛布（くずふ）と呼ばれる

・ヒメオウギズイセン

姫檜扇水仙　ヒメヒオウギズイセンは、明治時代中期に園芸用として日本に渡来しました。ヒメヒオウギズイセンはヨーロッパで作られたヒオウギズイセンとヒメトウショウブの交配種の球根植物です。庭植えや公園などで利用されます。ヒメヒオウギズイセンの葉は濃い緑色で、長さが30cm～80cmくらい、幅が1cm～2cmの細長い剣状です。中央に太い中央脈があるのが特徴です。ヒメヒオウギズイセンの別名「クロコスミア」とはギリシア語で「サフランの香り」を意味します。乾燥させた花をお湯に浸すとサフランに似た香りがする

・ムラサキカタバミ

背丈は約30cm、葉は根生三出複葉、小葉はハート形、裏面の基部に黄色い腺点がある。 花は主に春～初夏に咲き、葉の間から数個の花柄を伸ばして、先端に数輪を散形花序につける。直径1.7cmほどで、がく・花弁とも5枚。 青みのある濃い桃色で花筒部奥は白く抜け、花の中心部に向けて緑色の筋が入る。 植物体の栄養状態や環境に起因して花色が異なる場合もあるが、同じ環境で育てるとほとんどが同じ花色になる。環境省により要注意外来生物に指定されている。

・ヒメヒオウギ

姫檜扇　ヒメヒオウギは南アフリカ原産のフリージア属の植物です。名前に「ヒオウギ」と付きますがヒオウギ属ではありません。花色は濃いピンクや白で6枚の花弁のうち、3枚の付け根のところに濃い色が入ります。「ヒメヒオウギアヤメ」と呼ばれることもあります。

・シャリンバイ

和名タチシャリンバイは「車輪梅」の意味で、輪生する葉の配列の様子が車輪のようで、花が梅に似ることに由来する。シャリンバイのなかまの中でも、少し高くなることから、別名でタチシャリンバイともよばれる。葉が消炎、潰瘍、打撲（外用）に使用される.材は堅いことから槌等に用いる
海岸に生育し、乾燥や風に強く、刈り込みに耐えて病害虫の問題もない性質から公園などの植栽樹に利用される

・ヒメジョオン

キク科ムカシヨモギ属の植物。背の高さが30～150cmにもなる、白い花を咲かせる越年草である。同属のハルジオンと共に、道端でよく見かける雑草である。漢字に直すと「姫女菀」となる。「姫」は「小さい」、「女菀」は「中国産の野草」を表す。日本に入ってきた当初は「柳葉姫菊（やなぎばひめぎく）」と呼ばれたり、鉄道の沿線沿いに広がったことから「鉄道草（てつどうぐさ）」と呼ばれたりした。食べられる野草の一つとして知られる。茎が立つ前の若苗を食用とし、採取時期は関東地方以西が3 - 7月ごろ、東北地方が4 - 7月ごろ、北海道では5 - 7月ごろとされる。葉は茹でて、おひたしや和え物にしたり、生のまま天ぷらにする。花や蕾も天ぷらに利用できる

・ハルジオン

ハルジオン（春紫菀）は北アメリカを原産とするキク科の多年草。ヒメジョオンと非常によく似ていて、春に道端でよく見かける帰化植物です。「貧乏草」と呼ばれ,茎を折ると貧乏になるという俗説があります。繁殖力が強く在来種と競合することが危惧されており、2002 年に日本生態学会が刊行した「外来種ハンドブック」の付録「日本の侵略的外来種ワースト 100」では、特に生態系や人間活動への影響が大きい生物として、維管束植物の 26 種のうちのひとつにハルジオンが選ばれています。同属のヒメジョオンと見た目が酷似しているうえ、名前が混同されやすく「ハルジョオン」と呼ばれることがあります。余談ですが『ハルジョオン・ヒメジョオン』という松任谷由実の楽曲もあります。

・コバノランタナ

コバノランタナの開花期は5月～10月と長く、秋には特にきれいな花をたくさん咲かせます。花色は淡い紅紫色、ピンク、白、黄色など豊富です。コバノノランタナは、葉が小さめで背丈が低く、花が地面一面に開花するような匍匐性の低木です。グランドカバーや高いところから垂らしてのれんのようにして楽しんだり出来ます

・オオキバナカタバミ

観賞用として移入されたものが世界中で逸出し、帰化植物となって分布を拡大している。人間による土壌の移動で鱗茎が運ばれ、栄養繁殖によって旺盛に増える。春の在来種植物とニッチを競合して影響を与えるほか、家畜にとっては有毒であり、乳牛が誤食した場合、牛乳の乳脂肪量を低下させる。抜き取りや刈り取りによる駆除でも鱗茎が地下に残るため、一度定着すると蔓延りやすく、春先に群生する鮮やかな黄色の花が美しいために、駆除されずに放置されている場合も多い

・セイヨウタンポポ

セイヨウタンポポは、キク科タンポポ属の多年草である。ヨーロッパ原産の帰化植物。環境省指定要注意外来生物。日本の侵略的外来種ワースト１００に選定されている。あまり季節を問わず、黄色い舌状花を長い期間にわたって咲かせる。萼のように見える部分（総苞片）が開花時に反り返ることで、花に沿って固く閉じる在来種とは区別できる。花・茎・葉・根が利用され、食用、飲料用、ヘルスケア用、染色用、観賞用にされる。根にはコーヒーに似た香りと風味がある。欧米では「自然の薬局」といわれるほど、有用なハーブの一つとされている。英名のダンデライオンは、「ライオンの葉」の意味で、鋭いギザギザのある葉がその由来である

・セイヨウジュウニヒトエ

西洋十二単。ジュウニヒトエの園芸品種のこと。ジュウニヒトエは、花が重なって咲くさまを、昔の女官が着た十二単という衣装に見立てたもの。別名セイヨウキランソウ、アジュガ、ビューグル。ヨーロッパ原産の園芸品種。全体に長白色毛が密生しています。花茎は数本が株立ちとなって、茎の高さは10cm～25cmになります。茎先に、長さ5cm～8cmの花穂を出し、濃紫色の唇形花を多数、輪生状につけます。下から咲き上がります。花冠は長さ約9mmで、上唇は2浅裂し、下唇は大きく3裂します。葉は倒披針形で、波状の鋸歯があります。　果実は4分果からなります。性質が丈夫で繁殖力もあるため、一部で野性化している場所もあります。一般に観賞用のグランドカバーとして栽培されます。近年では品種改良によって、多くの花色があります。

・シロツメクサ

シロツメクサ（白詰草）はマメ科シャジクソウ属の一年草あるいは多年草。別名、**クローバー**、シロクローバー、オランダゲンゲなど。牧草、蜜源、地被植物として利用される。若い葉や花は食用とすることができる。葉の変異体である「四葉のクローバー」は、幸運のシンボルとして知られる。漢字表記は「白詰草」。江戸時代にオランダから長崎に輸入されたガラス器を衝撃から守るため、乾燥したクローバーを緩衝材として使用していたので、クローバー全体を指す名称として「詰草」という日本語が生まれた。本種は白い花をつけることから白詰草と呼ばれる。優秀な蜜源植物でもあり、濃厚な蜂蜜が得られる。また、若葉は食用になる。
薬用としても用いられる。全草を開花期に天日乾燥したものを煎じて使用する。痔の出血やストレスに用いる

・アオギリ

和名の由来は、キリ科のキリ（桐）が「白桐」とよぶのに対して、幹肌が青緑色で大きな葉がつく様子がキリに似ることから名付けられている。中国名の梧桐（ごとう）も日本ではよく知られている。公園樹、街路樹に利用される。アオギリが庭木や街路樹によく使われるのは、その耐火性にあり、過去の震災においても火災の延焼を食い止めた例もたくさんあった。
アオギリの花言葉は、「秘めた意思」「秘めた恋」とされる